



相模湾の地形(資料協力:独立行政法人 海洋研究開発機構)

10 藤沢の海

10・1 藤沢の海「相模湾」

地球は10枚以上のプレートで覆われており、日本列島は、「ユーラシアプレート」などの陸側のプレートと「フィリピン海プレート」の上に載っています。「フィリピン海プレート」の北端上には伊豆半島があり、プレートの接触する付近に、富士山、箱根山、丹沢などが位置します。また、伊豆半島を挟んだ両側のプレートの潜り込み部分が「相模トラフ」と「駿河トラフ」で、それぞれ水深が1,000mを超える谷状の海底地形を形成しています。私たちの暮らす神奈川県と目の前の相模湾は、プレート同士が衝突している場所であり、陸側のプレートに、南側からマンツルの対流に押される形で「フィリピン海プレート」が衝突し、陸側のプレートの下へ潜り込む最前線です。さらに、北海道の襟裳岬沖から房総半島沖にかけて、陸側のプレートに対して「太平洋プレート」が衝突し、プレート潜り込み付近に「日本海溝」という水深8,000m以上の巨大な谷を作っています。「相模トラフ」は「太平洋プレート」が衝突している付近で「日本海溝」とつながっています。

藤沢市が面している相模湾は、「水深が深いために、深海魚から浅い海の生物までが生息可能である」「プレートの境界が存在し、起伏に富んだ地形がある」「海面付近を流れる黒潮、日本海溝から相模トラフへと続く深海の潮流、河川から流れ込む淡水の影響をそれぞれ受けている」という特徴があります。その結果、海洋の環境が多様となり、多くの生きものの生息を可能にしています。

藤沢市は「相模トラフ」の北端、陸側のプレートの縁付近に位置しています。これらの地理的条件により、藤沢市の自然環境は、目の前の相模湾から多くの影響を受けています。

10・2 江の島周辺の海洋性無脊椎生物

「新江ノ島水族館」では、昭和62年から、江の島周辺の生物相調査を5年ごとに実施しています。平成24年までに、計6回の調査を実施しました。この間、調査確認できる種にはさまざまな変化が見られました。

江の島周辺において環境タイプ別に生息する種について

江の島島内および周辺の海岸には、岩礁(岩磯・転石)、砂泥浜、人工海岸(コンクリート護岸・消波ブロック等)の、3タイプの海岸により構成されており、岩礁ではクロアワビ、サザエ、オオヘビガイ、オオアカフジツボ、イソカニダマシなどが、砂泥浜では、チョウセンハマグリ、アサリなどが、人工海岸では、ホンダワラコケムシ、シロボヤなどが生息しています。

江の島周辺で減少傾向にある種

平成12年頃まで、江の島周辺の海域では、有機物質に由来する汚濁により、富栄養の状態が続いていました。その後、平成14年頃まで続けられた汚濁の改善努力と、江の島と境川河口の間に位置する砂州が拡大したことにより、境川の河川水の影響が、片瀬東浜側へは及ばなくなりました。このため、河川水の影響は江の島の北西岸側に限定的になり、砂州の拡大以前には多くの地点に見られた、富栄養な環境を好む、ホトギスガイ、ドロクダムシ科のヨコエビ類などの確認地点が減少しました。

江の島周辺で最近確認されるようになった種

富栄養環境の改善(汚濁縮減)や、河川水の流入の限定化が進んだことなどにより、比較的、外海的环境を好むタイプの海綿動物や棘皮動物が確認される地点が増加しました。また、節足動物では、クロフジツボやオオアカフジツボ、軟体動物ではケガキといった、外海的环境に見られる種の確認地点も増加傾向にあります。

(資料協力・文:新江ノ島水族館)



クロフジツボ



江の島:南の磯